

# 第13回 HPC-Phys 勉強会

## Dockerで体験する富岳のアーキテクチャ 「AArch64」ハンズオン

ハンズオン資料

[https://github.com/kaityo256/xbyak\\_aarch64\\_handson](https://github.com/kaityo256/xbyak_aarch64_handson)

慶應義塾大学理工学部物理情報工学科  
渡辺宙志

# 本ハンズオンの構成

- 事前準備編
  - Dockerイメージのビルド
  - SVEとXbyakの説明
- ハンズオン編
  - 動作確認
  - 組み込み関数編
  - Xbyak編

# Dockerイメージのビルド

ハンズオン資料「ハンズオン編」 「Dockerイメージのビルド」

## 適当な場所でリポジトリをクローン

```
git clone https://github.com/kaityo256/xbyak_aarch64_handson.git  
cd xbyak_aarch64_handson
```

## Dockerイメージをビルド(3～5分くらい)

```
cd docker  
make
```

# 富岳でやりたい人

ハンズオン資料「富岳実機での動作」

適当な場所(~/.github)でリポジトリをクローン

```
cd github  
git clone --recursive https://github.com/kaityo256/xbyak_aarch64_handson.git
```

インタラクティブキューに入ってXbyakのビルド

```
cd xbyak_aarch64_handson  
# ここでインタラクティブキューに入る  
cd xbyak_aarch64/  
make
```

環境変数の設定

```
export XBYAK_PATH=~/.github/xbyak_aarch64_handson/xbyak_aarch64  
export CPLUS_INCLUDE_PATH=$XBYAK_PATH  
export LIBRARY_PATH=$XBYAK_PATH/lib
```

組み込み関数はFCC、Xbyakは `g++ filename.cpp -lxbyak_aarch64` でビルドできる

# 富岳概要

ノード数：158976

ネットワーク：Tofu (24,23,24,2,3,2)

1CPU/1ノード

4CMG + 2アシスタントコア/1CPU

12 core/ 1CMG

ISA: Armv8.2-A + SVE

# 富岳概要

プログラマから見た

この辺はMPI

ノード数：158976

ネットワーク：Tofu (24,23,24,2,3,2)

1CPU/1ノード

4CMG + 2アシスタントコア/1CPU

12 core/ 1CMG

この辺はOpenMP

ISA: Armv8.2-A + SVE

ここをどうするか？

# 名前の整理

## ARM

## x86

命令セット総称

AArch32 (A32)  
AArch64 (A64)

IA-32  
AMD64, Intel64

拡張命令セット

NEON  
SVE

MMX, SSE, AVX,  
AVX2, AVX-512

マイクロ  
アーキテクチャ

A64fx

Skylake

↑が実装する  
命令セット

ARMv8.2-A + SVE

Intel64+MMX+SSE+...  
+AVX-512+...

gccに渡す  
オプション

-march=armv8-a+sve

-mavx2, -mavx512f, ...  
or  
-march=skylake

# CPUコアの性能

$$\text{性能} = \text{動作周波数} \times \text{コア数} \times \text{同時命令発行数} \times \text{SIMD}$$

富岳の場合(倍精度)

$$3072\text{GF} = 2\text{GHz} \times 48 \times 4 \times 8$$

(2 x 積和)

※ 演算にはレイテンシがあるが、パイプライン処理により「理想的には」1サイクルに1演算できる(スループット)



# CPUコアの性能

ここを上げたい

ここはもう無理

ここも多分無理

性能

=

動作  
周波数

x

コア数

x

同時命令  
発行数

x

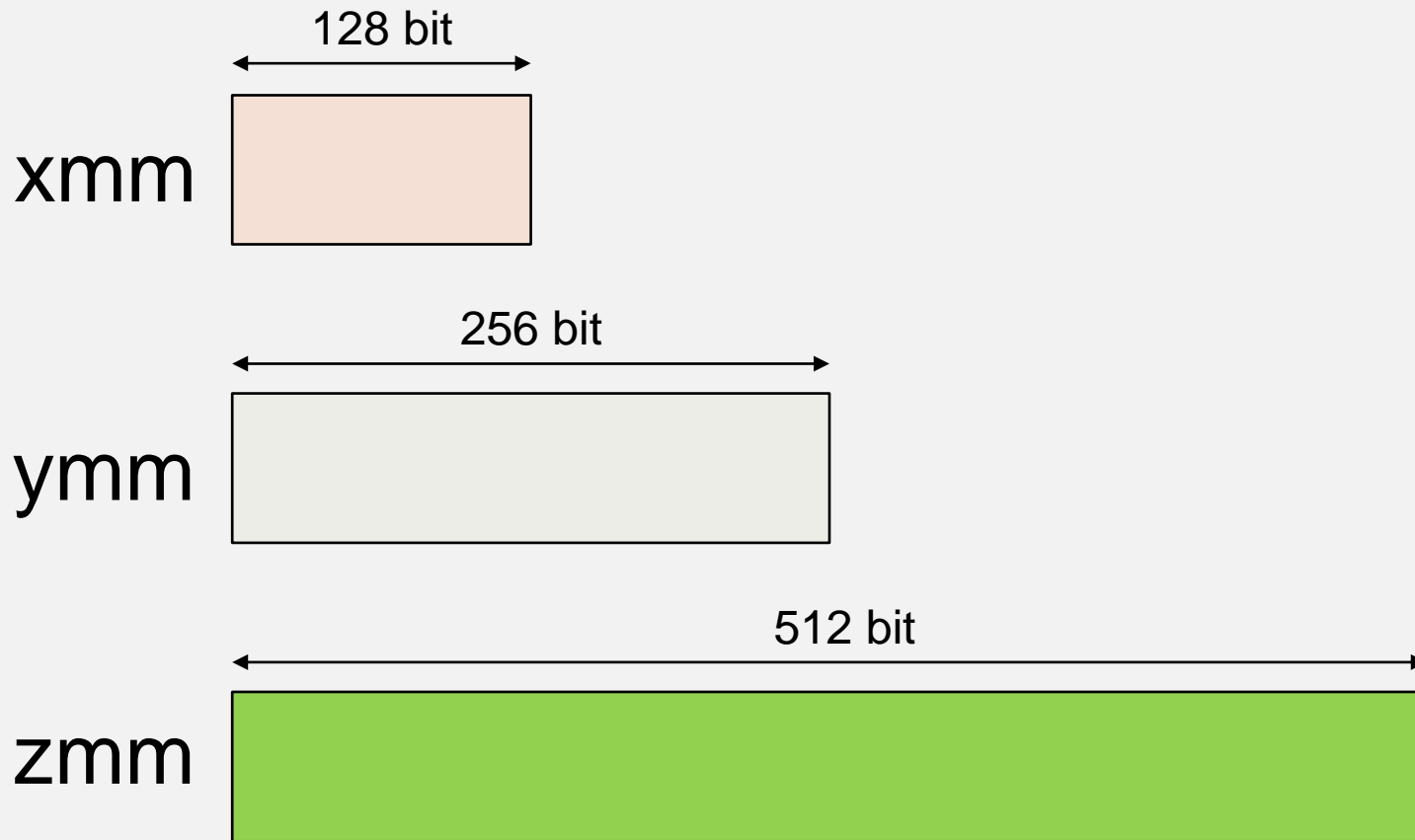
SIMD

ここを増やす  
(メニーコア)

ここを増やす  
(幅広SIMD)

# SIMD幅を伸ばす

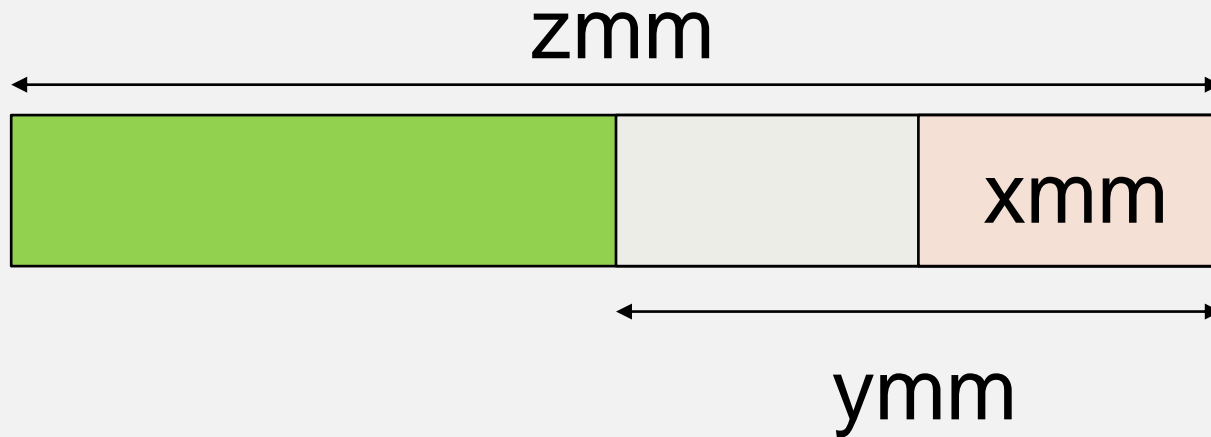
## x86の場合



順調に倍々ゲームが増えてきた

# SIMD幅を伸ばす

SIMD幅が伸びても下位を同じ名前でアクセスできるようにする



後方互換性を保つ



古いコードは、広くなったSIMD幅を活かせない



また全部書き直し . . .

# SIMD幅を伸ばす



SIMD幅が伸びるたびにコードを書き直し。なんとかならないかな...

SIMD幅を固定しない命令セットにすればよいのでは？



# SVEとは何か？

**S**calable

**V**ector

**E**xtension

幅を固定しない

SIMDの

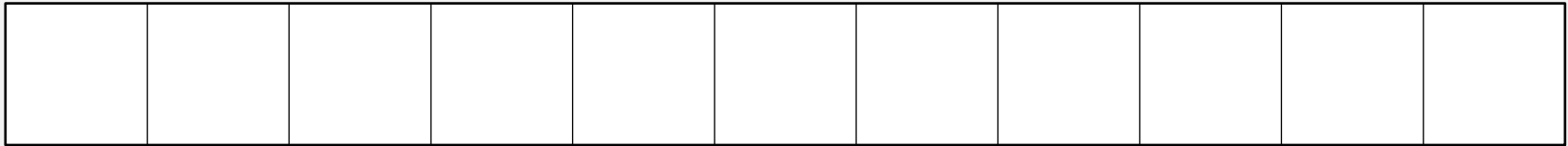
追加命令セット

**特徴**： Predicate-centric Approach

命令ごとにどの要素を使うかをマスク処理できる

# マスク処理

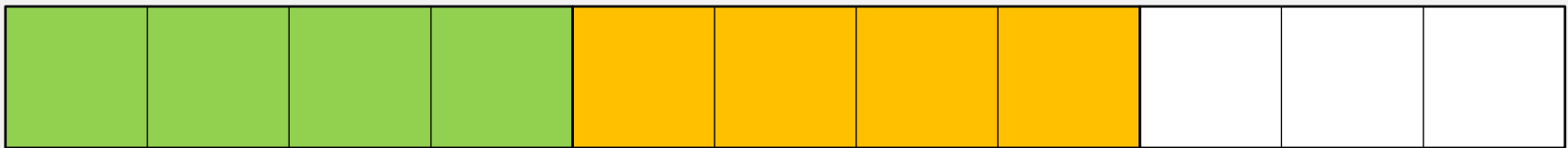
11個のデータを4つずつ処理したい



普通にやると3個余る

余りをスカラーで回す

→ベクトル2回転+スカラー3回転 ※11回転が5回転に



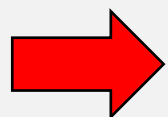
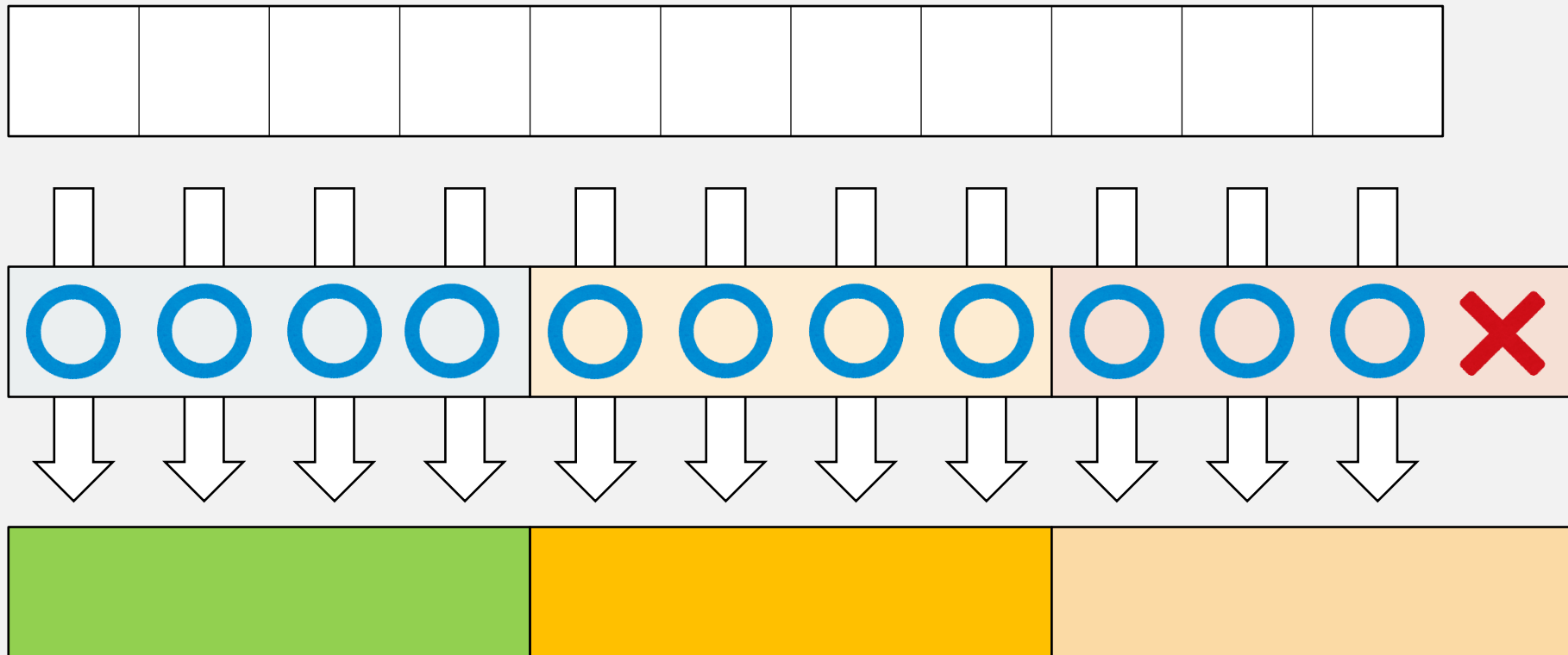
ベクトル処理

ベクトル処理

スカラー処理

# マスク処理

プレディケートレジスタにより、どの要素をロードするか指定



ベクトル3回転で済む

※11回転が3回転に

# SVEの概要

## スケーラブルなSIMD幅

スケーラブルなコードを書いておけば、将来SIMD幅が増えたハードウェアで実行した時に、その恩恵を受けることができる . . . という夢を見たのさ

## Predicate-centric Approach

ほぼ全ての命令にプレディケートレジスタを指定でき、どの要素にどんな命令を実行するか細かく指定できる



# SVEをどう使うか？

高レイヤ (楽だが細かい調整が難しい)

コンパイラに任せる

ディレクティブを指定する

組み込み関数で書く

Xbyakで書く

フルアセンブリで組む

低レイヤ (細かく調整できるが大変)

# 組み込み関数

アセンブリと一体一対応した関数を使う

組み込み関数

アセンブリ

svcntb

cntb

svptrue\_b8

ptrue p0.b, ALL

svld1\_f64

ld1d

概ね「sv + アセンブリ名 + 型」という命名規則

# 組み込み型

## svfloat64\_t

レジスタにfloat64\_tが詰まっているとして扱う  
コンパイル時に要素数が確定しない  
512ビットレジスタなら8要素

## svbool\_t

プレディケートレジスタを表す型  
コンパイル時にビット長が確定しない

こんな感じに使う

```
std::vector<float64_t> a;  
svbool_t tp = svptrue_b64();  
svfloat64_t va = svld1_f64(tp, a.data());
```

# 組み込み関数を使う

## Pros

- 関数の呼び出し規約を気にしなくて良い
- アドレッシングを気にしなくて良い
- レジスタ割り当てを気にしなくて良い
- コンパイラによる最適化が期待できる

## Cons

- 組み込み関数以外の場所は制御できない
- コンパイラが余計なことをする場合がある

# Xbyakとは

Xbyak (カイバック)はJITアセンブラ  
関数単位でアセンブリで書く

作者は光成(herumi)さん

**実行する命令を関数単位で実行時に作る**

Intelの機械学習ライブラリoneDNNなどが利用

x86向け

<https://github.com/herumi/xbyak>

Aarch64向け



[https://github.com/fujitsu/xbyak\\_aarch64](https://github.com/fujitsu/xbyak_aarch64)

# Xbyakの使い方

Xbyak\_aarch64::CodeGeneratorを継承し、コンストラクタにアセンブリに対応したコードを並べておく

```
struct Code :  
Xbyak_aarch64::CodeGenerator {  
    Code() {  
        mov(w0, 1);  
        ret();  
    }  
};
```

テンプレートに関数のシグネチャを指定して関数へのポインタを取得  
その関数を呼び出す

```
int main() {  
    Code c;  
    auto f = c.getCode<int (*)(*)>();  
    c.ready();  
    printf("%d¥n", f());  
}
```

# Xbyakの動作原理

実行時にメモリを確保して、そこに実行時に命令を並べる

```
struct Code :  
Xbyak_aarch64::CodeGenerator {  
    Code() {  
        mov(w0, 1);  
        ret();  
    }  
};
```

f:  
  
mov w0, 1  
ret



その領域に実行権限をつけ、先頭アドレスを呼び出すことで関数として使う

```
int main() {  
    Code c;  
    auto f = c.getCode<int (*)()>();  
    c.ready();  
    printf("%d\n", f());  
}
```

※x86では不要だが、ARMでは実行前にready()を呼ぶ必要がある

# Xbyakを使う

## Pros

- 実行時の情報を使ったコード生成ができる
  - キャッシュサイズやCPUの種類
  - コンパイル時に決まらない実行時定数
- **書いた通りに動く**
- 生アセンブリより書きやすい

## Cons

- **関数の呼び出し規約やアドレッシング等のアセンブリの知識必須**
- ローカル変数を自分で管理する必要がある
- レジスタ割り当てをする必要がある



# ハンズオン編

先ほどmakeしたディレクトリでmake runすれば  
Dockerの中に入ることができる

```
$ make run  
[user@291e9d9cad93 ~]$
```

xbyak\_aarch64\_handson/sampleにサンプルコードがある

以下でそれぞれ動作テストをする

- intrinsic/01\_sve\_length
- xbyak/01\_test

# 組み込み関数編 (1)

## プレディケートレジスタ (PR)

SVEのレジスタは128ビット x N

プレディケートレジスタは最低8ビット単位

→ レジスタ長は16ビット x N

512ビットならN=4なので、PRは64ビット

## 確認すること

1. どの型に使うかにより、立てるビットが異なる
2. 立てるパターンを指定できる
3. レジスタ長を変えて実行してみる

# 組み込み関数編 (1)

## 組み込み関数

```
svptrue_b8()  
svptrue_pat_b8(SV_ALL)
```



# アセンブリ

ptrue p0.b, ALL

64bit

[illegible]

## 組み込み関数

```
svptrue_b16()  
svptrue_pat_b16(SV_ALL)
```



## アセンブリ

ptrue p0.h, ALL

01

svpttrue\_ **b32**



ptrue p0.s, ALL

svptrue\_ **b32**



ptrue p0.d, ALL

# 組み込み関数編 (2)

## レジスタへのロード

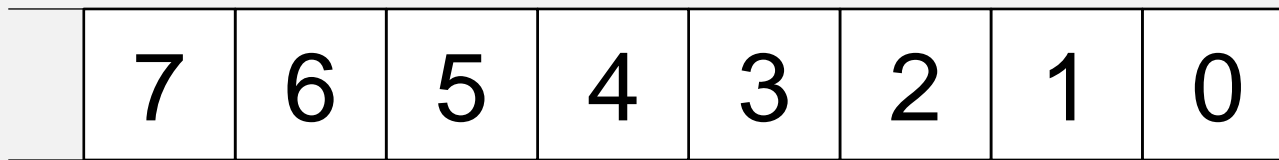
svfloat64\_t型へのロードや加算を試してみる

## 確認すること

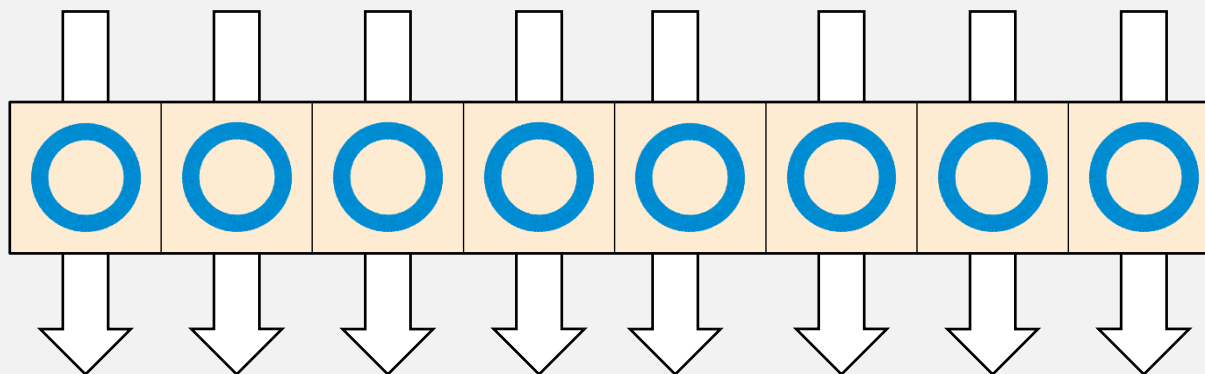
1. 指定の先頭アドレスからまとめてレジスタにロードできる
2. 一回の命令で複数要素まとめて演算できる
3. 演算にマスク処理ができる
4. inactiveな要素に対して
  1. ゼロクリアする (zeroing predication)
  2. 第一引数透過 (merging predication)

# 組み込み関数編 (2)

```
double a[] = {0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7};  
svfloat64_t va = svld1_f64(svptrue_b64(), a);
```



メモリ



プレディケート  
レジスタ



SVレジスタ

# 組み込み関数編 (2)

そのまま全部足す

7	6	5	4	3	2	1	0	va
---	---	---	---	---	---	---	---	----

○	○	○	○	○	○	○	○
---	---	---	---	---	---	---	---

+	1	1	1	1	1	1	1	vb
---	---	---	---	---	---	---	---	----

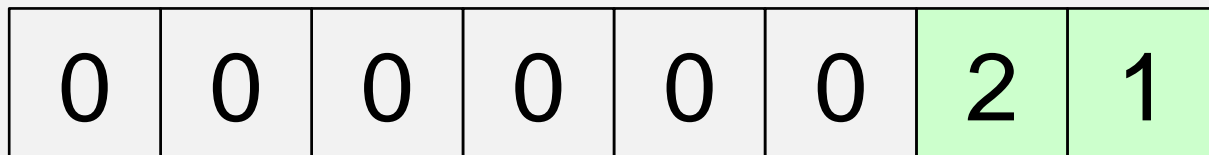
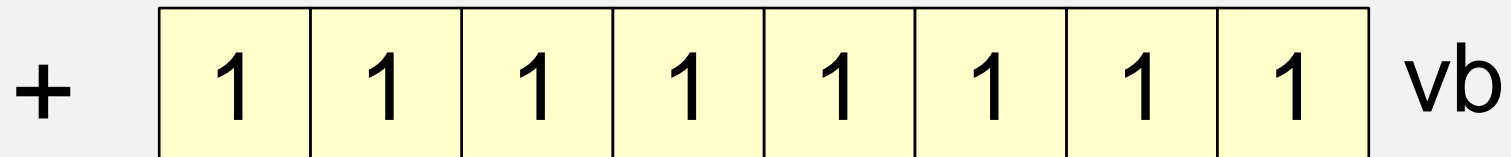
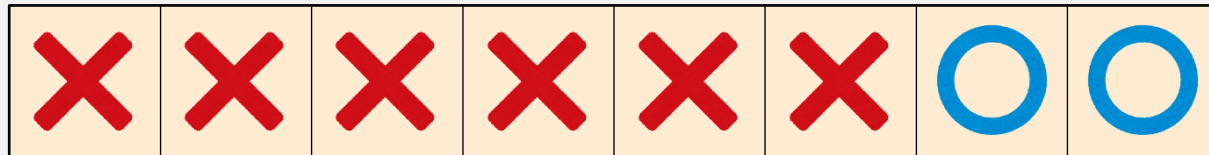
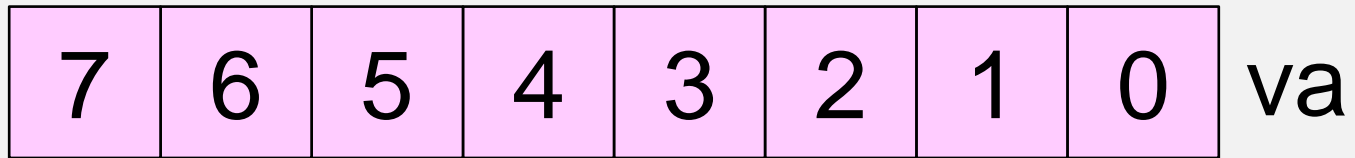
---

8	7	6	5	4	3	2	1
---	---	---	---	---	---	---	---

## 組み込み関数編 (2)

Inactiveな場所は**ゼロクリア** (zeroing predication)

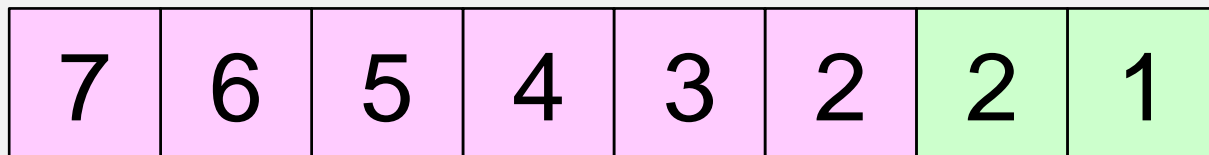
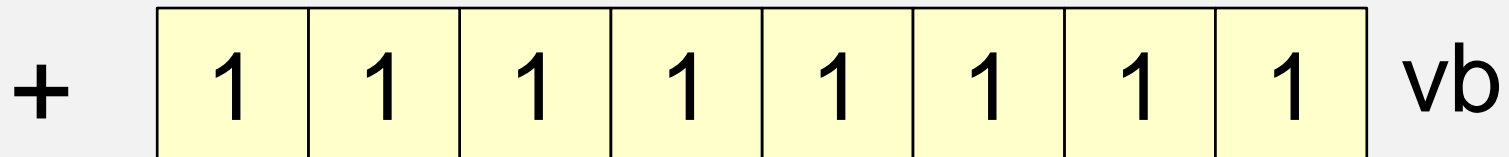
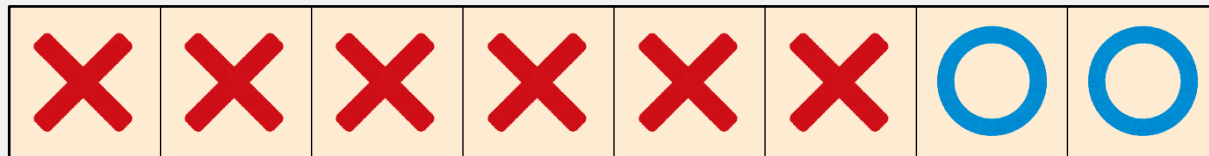
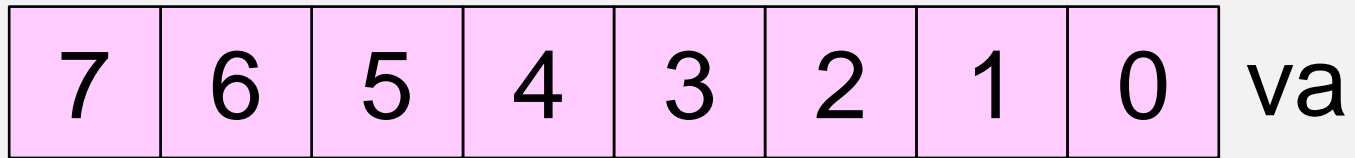
svadd\_f64\_**z**(svptrue\_pat\_b64(SV\_VL2), va, vb)



# 組み込み関数編 (2)

Inactiveな場所は**透過** (merging predication)

svadd\_f64\_m(svptrue\_pat\_b64(SV\_VL2), va, vb)





# Xbyak編(1)：呼び出し規約

ABI (Application Binary Interface)が定めるものの一つ  
関数を呼び出す時、引数をどうやって渡すか、戻り値を  
どう返すかを定める

こんな関数を作りたい

```
int f(int i){  
    return i + 1;  
}
```

Xbyakではこう書く

```
struct Code :  
Xbyak_aarch64::CodeGenerator {  
    Code() {  
        add(w0, w0, 1);  
        ret();  
    }  
};
```

整数の第一引数がレジスタw0に渡され、戻り値を  
w0に入れてretすることを知っている必要がある

# Xbyak編(2)：ダンプの確認

Xbyakのコードは動的に作られるため、実行時までアセンブリがわからない  
→ 実行時のコードをダンプし、逆アセンブルすることでデバッグする

```
#include <cstdio>
#include <xbyak_aarch64/xbyak_aarch64.h>

struct Code : Xbyak_aarch64::CodeGenerator {
    Code() {
        mov(w0, 1);
        ret();
    }
    void dump(const char *filename) {
        FILE *fp = fopen(filename, "wb");
        fwrite(getCode(), 1, getSize(), fp);
    }
};
```

ファイル名を受け取り  
機械語バイナリを保存

# Xbyak編(2)：ダンプの確認

```
int main() {  
    Code c;  
    auto f = c.getCode<int (*) (int)>();  
    c.ready();  
    c.dump("xbyak.dump");  
    printf("%d¥n", f(10));  
}
```

ここでダンプをxbyak.dump  
という名前で保存

実行するとxbyak.dumpができるので、objdumpで逆アセンブル

```
$ aarch64-linux-gnu-objdump -D -maarch64 -b binary -d xbyak.dump
```

長いので xdump にaliasをはってある

```
0000000000000000 <.data>:  
0: 52800020      mov     w0, #0x1      // #1  
4: d65f03c0      ret
```

# Xbyak編(3) : FizzBuzz

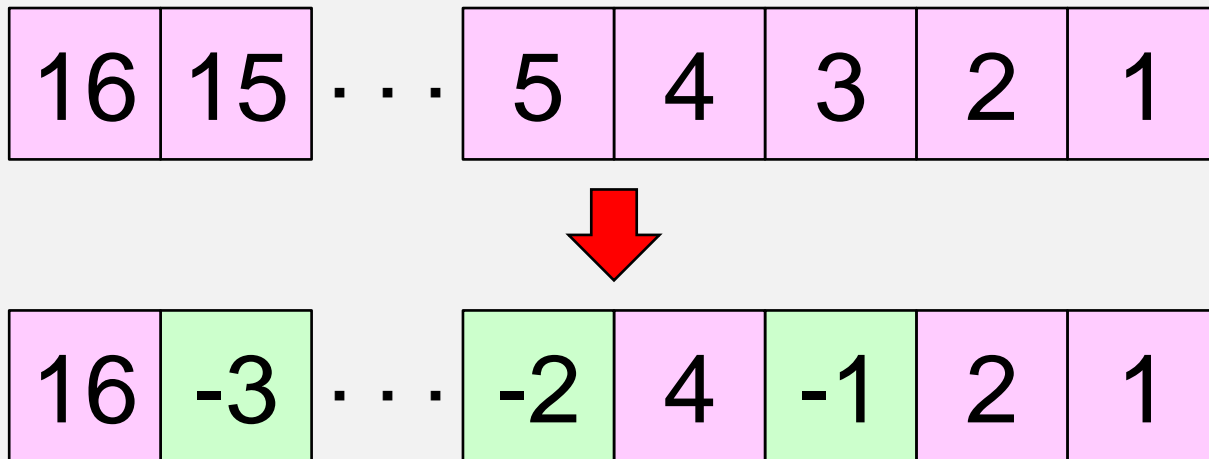
与えられた配列の要素が

3の倍数なら-1

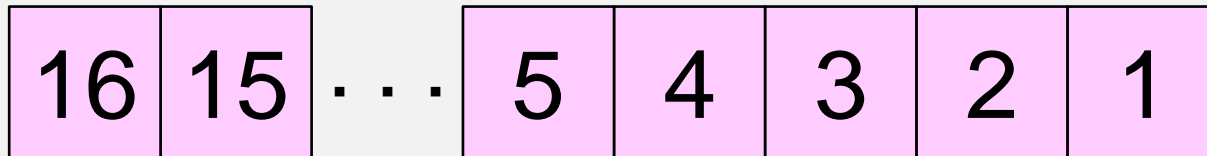
5の倍数なら-2

15の倍数なら-3

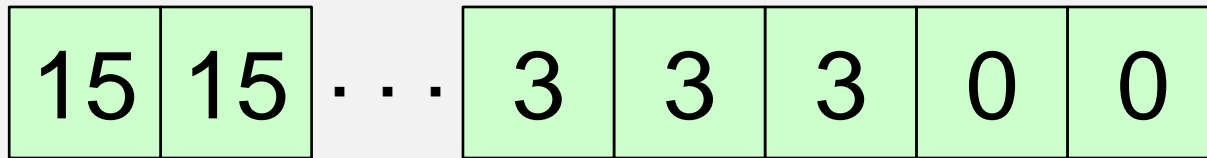
で上書きする



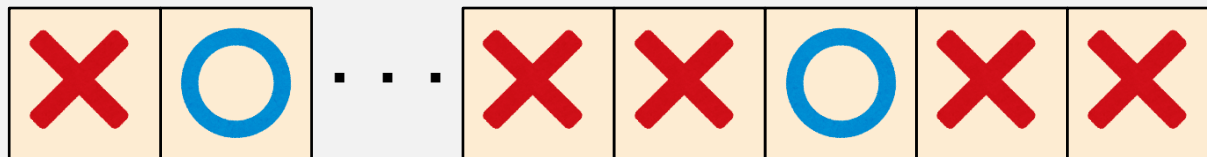
# Xbyak編(3) : FizzBuzz



3で割って3をかける

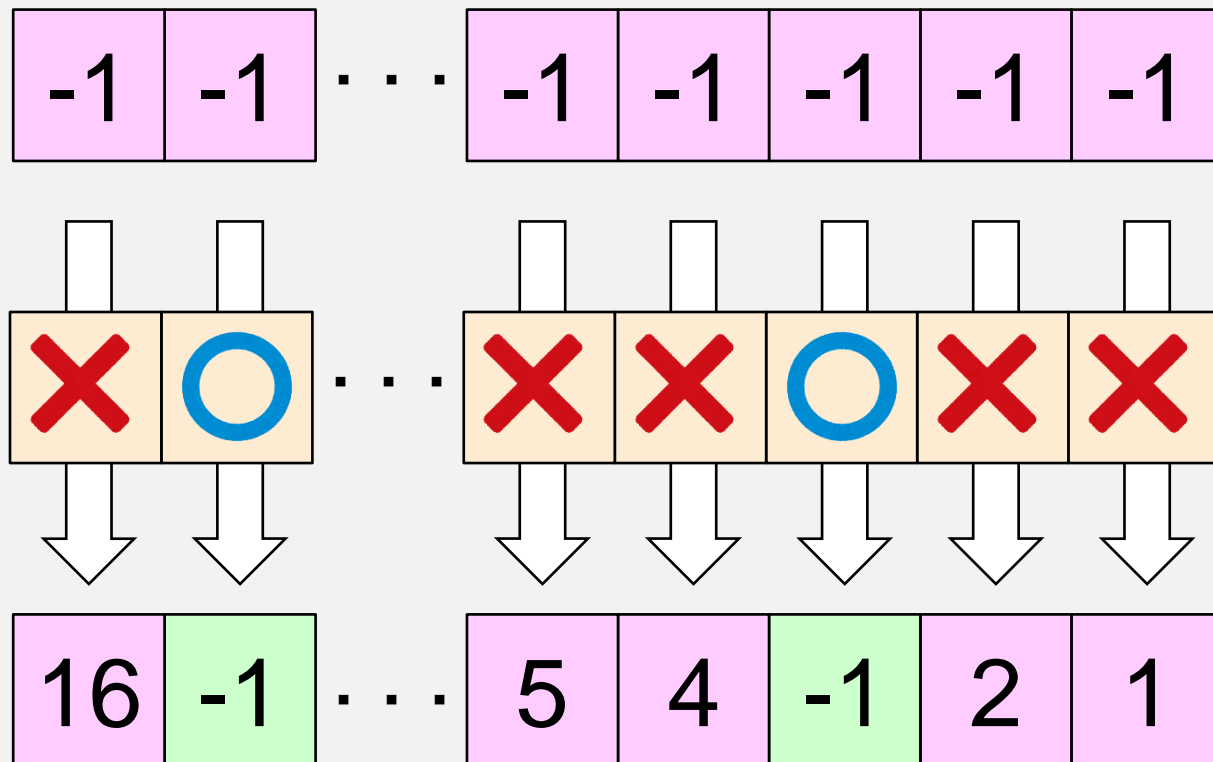


等しい場所にフラグを立てる



# Xbyak編(3) : FizzBuzz

作成したマスクを使って書き戻し(store)



5の倍数も同様

15の倍数は、3の倍数マスクと5の倍数マスクのANDをとる